

---

I can love myself

カイリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I c a n l o v e m y s e l f

### 【Nコード】

N 6 2 5 6 A

### 【作者名】

カイリ

### 【あらすじ】

少年は愛されることをしらなかった。ただ純粹に愛されたかった。自分を愛してくれる人は一体どこにいるのだろうか？

## （前書き）

この小説はハリポタ親世代のお話です。シリウスがホグワーツ入学時です。

愛がほしかった。偽りなんかじゃなくて、作り物なんかじゃなくて、誰かのお下がりなんかじゃなくて……………。俺だけに向けられる、真実の愛が。

I can love myself

父さんや母さんに優しくしてもらうためには、とにかく従順でいること。

「はい、父上、母上、」

なんてね。そうして笑顔でいればいい。物心ついた時には、それがもう染み付いていた。無意識のなかでもできる。心のなかで

「黙れこの野郎」

などと罵倒していても、外見上はにっこり笑っていられるんだ。

鏡の前に立って、自分の姿を見つめる。

「母上」

が整えてくれた身なり。可笑しいほどきっちりした、パーティにでも行くような衣装だった。

カレンダーを一瞥する。丸のついた日付。9月1日。今日は、11年間待ち焦がれた日だった。自分の誕生日なんかよりも楽しみにしていた日。今日の11時に出る列車に乗って、ホグワーツ魔法魔術学校に行くのだ。

ローブや杖や鍋なんかを詰め込んだトランクを引きずりながら、もう一度鏡を見る。

そこには、如何にも聞き分けのよさそうな少年が立っていた。張り付いた作り笑いは、まわりの大人たちのお気に入りだ。自分の

持つ全ての中で、この笑顔が二番目に嫌いだった。ワースト・ワンはもちろん、両親に気に入られようと振る舞う自分。  
「行ってくるよ」

鏡の中の少年に言い、部屋を出た。

\*

「何か困ったことがあったら、フクロウ便を寄越しなさい」

汽車発二分前、父さんが言った。

「はい、父上」

にっこりと言う。

「週に一度は手紙をかくのですよ」

こちらは、心配顔の母さん。

「はい、分かりました、母上」

やっぱり、にっこり。両親に向ける顔は、これさか持っていないのだから仕方ない。

レギュラスが何か言いたそうにしていたが、言葉を探せず、頑張れよ、とだけやつと口にする。

「父上と母上に迷惑をかけるなよ」

頭をくしゃつとして、再び両親に向き直った。

「いつてきます」

ほとんどの車両はもう生徒でいっぱいだった。結構な人数がいるもんだと、思わず感心する。

真ん中の車両の、男の子が一人で乗るコンパーメントを覗いて声をかけた。男の子の向かいの席を指差しながら。

「そこ、空いてる？」

男の子が一瞬きよんとする。彼も一年生なのかもしれない。どこか安堵したような表情をして、頷いてみせた。

「君、一年？」

男の子が聞いてくる。人懐こい笑顔に戸惑いながら、答える。  
「そう。君も？」

「うん。ぼく、ジェームズ・ポッターっての」

「ぼくは、シリウス・ブラックだ」

とりあえず、愛想よく笑ってみせる。ジェームズはじつところを見つめ、手を差し出す。

「え？」

「握手、しょ？　もしかしたら、同じ寮になるかもしれないし。これからよろしく」

「あ、ああ……うん」

あっけにとられて握手すると、ジェームズはににことまた笑顔になった。

その握手した手のなかで、何やらもぞもぞと動くものがある。

「うわっ？」

慌てて手を引くと、茶色い蛙　　少し溶けた蛙チョコレートが飛び出した。

「あははっ驚いた？」

ジェームズがけらけらと笑う。シリウスはチョコのついた自分のてのひらとジェームズの顔と、窓をよじ登る蛙を見比べた。

「今の、手品っていうんだ。マグルの遊びの一つなんだけど」

「手品？　魔法を使ったんじゃないのか？」

「うん。マグルは魔法を使えない代わりに、いろいろな仕掛けを使って手品をするんだ。魔法には及ばないけど、暇潰し程度にはなるだろう？」

シリウスはようやく落ち着いて頷いた。

ジェームズはくしゃくしゃの黒髪を掻き上げながら窓を開ける。蛙チョコレートが窓の外に逃げる。吹き込んだ風が二人の髪をなびかせ、頬を撫でた。

「ポッター君、君、何でそんなに……」

「ジェームズでいいよ。堅っ苦しいの、好きじゃないんだ」

「じゃ、ジェームズ。君はどうして、そんなにマグルのことに詳しいんだ？」

「マグルに詳しいわけじゃないよ」

ジェームズは肩をすくめる。

「ただ、おもしろいことは好きだからさ。手品って、おもしろいとは思わないか？ ブラックくん？」

挑発するような顔になって言うジェームズ。シリウスは少し目を丸くしたが、すぐにニヤリと笑った。

「シリウスでいいよ。堅っ苦しいの、好きじゃないんだ」

シリウスはネクタイを乱暴にほどき、シャツの第2ボタンまで開けた。

二人で顔を見合わせると、どちらからとなく笑い出す。

多分、今まででいちばん自然に笑っているのではないかと、シリウスはそう思った。

\*

組分けを待つ間の時間は、ひどく不快だった。今まで感じたことないプレッシャー。なぜこんなにも緊張するのは分からない。どこの寮に入ったって、別に構わないと思っていたのに。

両親はスリザリンに入ることを希望していた。……と言うよりスリザリン以外の寮なんて考えてもいないだろうけど。ブラック家はいわゆる

「純血」

の血筋で、親族の殆んどはスリザリンの出身だった。

「純血」

がそれほど偉いとは思わない。むしろ、馬鹿馬鹿しいとさえ思う。けれどスリザリンに入るのが嫌だというわけでもなかった。スリザリンならば両親が喜ぶことは目に見えている。

「ジェームズ・ポッター！」

組分け帽子がよばれる。はっと顔を上げて見ると、ジェームズが確かな足取りで組分け帽子に近付いていく。ジェームズはこの寮になるんだろう。シリウスは彼を見つめながら思う。別にどこだって構わない。けれどジェームズと同じ寮だったなら、どんなに楽しいことだろう……。

「グリフィンボール！」

わあっ、と歓声。ジェームズはグリフィンボール生に迎えられて、笑顔を見せていた。

グリフィンボールなら、いい。その笑顔をみて、シリウスは何とはなしに思う。でも、もしグリフィンボールだった時、両親はどんな顔をするだろう？ 親子の縁を切られてもしたら、どうしよう？

「リーマス・ルーピン！」

シリウスの5つ前の生徒が名を呼ばれる。少し顔色が悪い。けれどその生徒 リーマスの瞳は驚くほど強い光を持っていた。

「グリフィンボール！」

ああそうか、グリフィンボール。シリウスはリーマスを見ながら呟く。彼のように強い眼差しで、前を見据えていけば、グリフィンボールに入れるだろうか？ ジェームズのように、にこにここと笑って進んでいけば、グリフィンボールに入れるだろうか？ どうすればブラック家の自分がグリフィンボールに入れるのだろうか？

……………？

「セブルス・スネイプ！」

シリウスの前の少年が無言で歩き出す。やや長めの黒髪が、わずかに揺れていた。その髪と同じ色の瞳。白い顔に張り付く暗い表情。

シリウスはセブルスの表情に、ギクツと身じろぎした。

どこかで見たことがある。誰かに似ている。そんな気がした。



「スリザリン！！」

わぁっとスリザリンのテーブルが湧いたが、セブルスはいくま  
で低いテンションのままテーブルにつく。

ああ、もう、次だ。

心臓が高鳴る。広間のなかがわずかにざわついた。

「見て。ブラック家の子だ。彼は、スリザリンで決まりだろう」

そんな声が耳に入ってくる。

僕がこの寮に入るかなんて、まだ分からないだろう！ 勝

手に決めつけるな！

そう、怒鳴ってやろうかと思った。

両親に愛されたい。それならば、スリザリン。

ジェームズと同じ寮ならばいい。それなら、グリフィンドール。  
どちらに入りたいかなんて、もう自分ではきめられなかった。

帽子を被る。鼻のあたりまでくる。

「ふうーむ、悩んでいるようじゃな。頭は悪くない。人並み以上の  
勇気もある。親に愛されたいか。……しかし、自分を変えたいと思  
っておるようじゃな。それが、何より強い……。ならば、グリフ  
ィンドールッ！！」

はあ、そうですか。……え、今、グリフィンドールドルッ  
て言った？

きょんとんとして帽子を脱ぐ。

生徒たち 特に、スリザリン生とグリフィンドール生 が  
ざわざわと驚きを見せていた。けれど、一番驚いたのは、シリウス  
自身だ。何かの間違いでは？ と思わず考える。しかし、そんな  
考えは大きな拍手によって吹き飛ばされる。 ジェームズだ。  
彼が手が真っ赤になるほど強く、拍手をしてくれた。つられて回り  
の生徒たちも歓声をあげた。

シリウスは笑顔になって立ち上がり、手を振るジェームズの元  
に駆けていった。

＊

寮の部屋は、四人部屋だった。シリウスの家の部屋よりは狭いけれども、気に入った。何よりジエームズと同室だということがうれしい。

ほかのルームメイトは、先ほどの組分けで見たリーマス・ルーピント、背の低いピーター・ペテグリュウという少年だ。

シリウスは彼らと遅くまでおしゃべりし、日付の変わるころに眠りに落ちた。

気がつくとシリウスは、グリフィンドールの談話室に立っていた。さつき通ったときにはなかった、大きな鏡が置いてある。

鏡の中をのぞいて、シリウスはぎよつと後ずさった。

そこにあつたのは両親の姿。無言でこちらを見ている。シリウスは着崩したシャツをきちんと直しながら鏡を凝視した。

「グリフィンドール、だったそうだな」

父さんが冷たい声で言う。思わず息を呑む。こんなにも冷酷な表情をした父親を見たことがなかった。

「……はい」

「我がブラック家からグリフィンドール寮の者が出ようとは……」

「でも、僕は……」

「黙れ、シリウス。お前は我が家の恥だ」

「……ッー！」

手足に力が入らない。冷や汗が流れた。

「ち、ちつえ……」

声が震える。両親はシリウスに背を向けて遠ざかっていった。

「父上！ 父上！ 母上！ ……待って……父上っ！！」

＊

「シリウス……シリウス……」

頬に冷たい感触。誰かがしきりに名前を呼んでいる。

「シリウス!!」

はっと目を開けると、ジェームズの心配そうな顔が間近にあった。

「あ……ジェームズ……?」

「大丈夫かい? ずいぶん嫌な夢でも見ていたようだけど」

「ああ……うん……。ごめん、起こしたか?」

「平気さ。なかなか寝付けなかったただけだから」

ジェームズは肩をすくめた。その仕草に、なぜか安心する。

「あのさあー、シリウス。……答えたくなかったら、答えなくてもいいよ。でも、……もしかして君、親と何かあった?」

「……寝言言ってた、僕?」

口元を押さえると、ジェームズは苦笑してうなずいた。シリウスは深くため息をつく。

「……うちの親さ、僕がグリフィンドールだと知ったらたぶん、相当嫌がると思うんだよね。……知ってると思うけど……うちは代々スリザリンの出身者が多い家系でさ……血筋を一番に考えるようなところがあるんだ」

あれは、予知夢だったのかもしれない。朝にはふくろう便で、もう一度同じことを告げられるような気がした。

「幼いころから、親に嫌われないように、とだけ考えながら生きてきたんだ。とりあえずいうことを聞いていればいろいろ与えてくれたし……」

自嘲。

自分はなんて厭味な奴なのだろう、と思った。これではまるで、自慢話だ。聞かされるジェームズの身にもなってみる。そう自分に言い聞かせるが、一度話し始めたら止めることなどできなかった。出会って一日と経たないジェームズに、こんな話をしてもどうしよ

うもないのに。

「でも、大人に媚を売る自分が大嫌いだった。いつそ家出でもできたら、どんなに楽だろう、とも思った。でも、それもできなかった。……頼る親戚も、友達も……行く当てが、ひとつもなかったから」

話が進むにつれ、自己嫌悪が心の中を支配していく。せつかくできた友人なのに、これではジェームズに嫌われてしまう……。

「馬鹿！ 阿呆！ ヘタレ！ 間抜け！ 人間のごみ！ クズ！」

いきなりジェームズが大声で言う。シリウスは目を丸くした。

「今の、君の代弁ね。……ひとつ聞くけど、君は親のこと、どう思ってるの？」

「どう、って……」

「好き？ 嫌い？ 尊敬してる？ 恨んでる？」

「……たぶん、大嫌いだと思う。でも、そんな親にでも、愛されたかった」

シリウスは恥ずかしさと、情けなさと、悲しさで胸がいつぱいになった。

けれどジェームズはからかうこともなく、あきれた様子もなく、ひどく穏やかに微笑んだ。何がおかしいのか、と反論する気にもなれず、シリウスはうつむく。

「本当のこと言うとき、初めて君を見たとき、少し気に入らなかったんだ」

ジェームズはさらりと言うけれど、なかなか身にこたえた。シリウスは深い深いため息をつく。するとジェームズが、励ますように肩を叩いてきた。

「でも話してみると、すごくいい奴だってわかった。賢いし、正直で素直だし、ずっと話していて飽きない人って、君が初めてなんだ」

「……そうかなあ」

「そうさ。ここではみんなが君のこと、愛して、大切にしてくれると思うな。少なくとも僕らは、シリウスのことが大好きさ。」

「な？ リーマス、ピーター？」

ジェームズが声をかけると、のそりとリーマスとピーターが体を起こす。

「う、わ……起きてたのか？　ずっと？」

シリウスはかあつと頬を赤くしてリーマスとピーターをみる。

「話に加わるチャンスを失って……ごめん」

リーマスが申し訳なさそうに頭を下げる。ピーターは半分寝ているようだ。

「がんばろうよ、きっとみんな、愛してくれる」

だからまずは、自分自身のことを愛せるようにならなくちゃ。

ジェームズが微笑む。シリウスは、何も言うことができなかった。

\*

小さなメモをふくろうのくちばしにくわえさせる。羽音を響かせて空に消えた影を見つめていたシリウスは、ふと人の気配を感じて振り返る。ジェームズだった。

「ふくろう便？　家にかい？」

「うん」

「なんて書いたの？」

「『グリフィンドールだった』。それだけ。君のおかげで、ふっきれた」

微笑み、シリウスはジェームズに手を差し伸べた。鮮やかな笑顔は、やっぱり変わらずそこにある。　　きつと、愛されるって、

こういうことなんだ。

手を差し伸べれば握り返してくれる。

辛いときには肩を支えて励ましてくれる。

少なくともあの列車の中、ジェームズが差し出してくれた手はとも大きくて、優しくて、自分に対する思いやりを感じた。そして今なら自分を変えられると、感じる。

どんなに手を伸ばしても、空を仰いで泣いても。

愛は、やってこない。愛は気まぐれで、春風に吹かれるたんぽぽの綿毛のようなものだから。気ままに流れてきた綿毛がこちらにやってきたとき、その姿に気づくことができるのは、それを受け入れる態勢が整ったときだ。ひとたび根を張れば、いつまでも強く根付く心の深く暗いところにまで、根を伸ばす。

だからこの小さな愛を、精一杯大切にしよう。ずっとずっと待ち焦がれて、ようやく手に入れた愛だから。

そして力いっぱい愛を返そう。それが自分ができる唯一のこと。愛を知らなかったからこそ、愛のすべてを感じられる。愛してもらった分、それ以上の愛を返せる。そうしてみんなのこころを、愛でいっぱいにしよう。

「I love you . I love everything .  
And I can love myself」

静かに口にのせたコトダマは、響きもなく消え去った。

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。シリウスはきっとジェームズに救われたと思うんです。少しでも共感していただければ幸いですVV

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6256a/>

---

I can love myself

2010年10月28日07時43分発行